

暑いですね。これを書いているのは7月の中旬から下旬。毎日の蒸し暑さに閉口しています。ただでさえ良くない頭のはたらきもその影響を受けて活発ではないので、今回はいつもより「リラックスして読めるお話」をしようと思います。

肉類の脂身、麩(麩菓子も)、にんじん ー。私は食べられません。食べたくありません。小学校時代の給食できらいになりました。ある日、大好きなカレーが出ました。赤身の肉だと思って食べていたら、いつになっても噛みくだけません。ガムのように噛んでいたら、気持ちがわるくなりました。出してみると白いかたまり、脂身だったのです。大きなにんじんも入っていました。舌にからみつような独特の味が口いっぱいに広がり、気持ちがわるくなりました。別の日、午前中の「理科」で教科書にカマキリの卵の絵が出てきました。そのあとの給食で出たのが麩でした。見ただけで気持ちがわるくなりました。あれから50数年経ちます。いまでも肉の脂身は1～2ミリ端っこにへばりついていても取りのぞきます。永谷園の「お茶づけ海苔」やインスタントみそ汁に入っている麩は、お湯を入れる前にお椀から出します。にんじんは「生酢(大根とにんじんを千切りにして酢で和えたもの)」なら何とか食べられるようになりましたが、ステーキに添えられる大きなにんじんはお隣の方のお皿に即、移させていただきます。孫たちが好ききらいを言っても「ムリして食べなくてもいいよ」と言える〈やさしいジイ〉なのはそのおかげです。

あなたは何の肉が好きですか。わたしはなんと言っても「牛」です。「鶏」もいいですね。脂身と鶏皮は引きちぎりますが！ でも、きょうは「豚」のお話をいたします。

☞ ユダヤ人たちの「ボーンヘッド」!?

ー 『マタイ』8章28～34節 ー

* bonehead: 『骨しかない頭のこと。転じて、間抜けで、ばかなブレイのことを指す。監督は、選手がボーンヘッドをすると怒るが、じつはこういう選手のほうが理屈をいわず、反抗もしないので、思慮深い選手以上に好んでいる。だから、ブレイのうえでのボーンヘッドが、いつまでたってもなくなるのだ。』宝来正之『プロ野球大辞典』より。

イエスさま、なんということをし！

イエスがおこなった「奇跡」については第34～39回でお話いたしました。「奇跡物語」は〈自然奇跡物語〉と〈治癒奇跡物語〉の二つのグループに分かれていましたね。今回は後者の中から、いわゆる「悪霊祓い」についてのお話をご紹介します。

.....

28 イエスが(㊦ガリラヤ湖の)向こう岸のガダラ人の地方に着かれると、悪霊に取りつかれた者が二人、墓場から出てきてイエスのところにやって来た。二人は非常に凶暴で、だれもその辺りの道を通れないほどであった。29 突然、彼らは叫んだ。「神の子、かまわないでくれ。まだ、その時ではないのにここに来て、われわれを苦しめるのか。」30 はるかかなたで多くの豚の群れがえさをあさっていた。31 そこで、悪霊どもはイエスに「われわれを追い出すのなら、あの豚の中にやってくれ。」と願った。32 イエスが、「行け」と言われると、悪霊どもは二人から出て、豚の中に入った。すると、豚の群れはみな崖を下って湖になだれ込み、水の中で死んだ。33 豚飼いたちは逃げ出し、町に行って、悪霊に取りつかれた者のことなど一切を知らせた。34 すると、町中の者がイエスに会おうとしてやって来た。そして、イエスを見ると、その地方から出て行ってもらいたいと言った。

..... 『マタイ』8章

イエスが生きた時代のユダヤ社会には、「口がきけない」、「目が見えない」など、さまざまな

病気の原因に対して二つの見方がありました。一つはこれから説明いたします「悪霊憑き^{あくりょうづ}」、すなわち「口をきけなくする悪霊」や「視力をうばう悪霊」など、いろいろな病気の「担当悪霊」がいると考えていました。もう一つは「律法」に対する違反行為から生ずるもの、つまりその人はもちろん、家族・先祖の犯した罪でさえ病気の原因になる(因果応報)と考える見方です。

『聖書』にはイエスはその生涯において、重病人や罪人、貧しい人々など、偏見と差別のまなざしのなかで苦しんでいた人たちなどに寄り添って、彼らの身体やこころを癒したことがたくさん書かれています。私たちがイエスに抱くイメージでもっとも大きいのは「いのち」の尊さや平等を説き、私たちを「友」と呼び、「神の愛を伝えた人」 — ということだと思えます。そのイエスがこの話のなかでは、悪霊に取りつかれた人を救うために『豚の群れ』に悪霊を追い込み、豚たちはガリラヤ湖になだれ込んで犠牲になった … という残酷なことをしています。豚たちにとっては何とも迷惑極まりない話です。同じ内容の話が『マルコ』5章13節にあるのですが、ここでは豚の数、なんと『二千匹ほど』とあります。少々小さくて、ブウブウとさわがしく、でも可愛い目をしたブタさんたちが二千匹ですよ！ その大群がガリラヤ湖に飛び込んだというのですから、いったいどんな光景になったのでしょうか!? ちなみにガリラヤ湖の面積は約170 km²で、日本で二番目に広い湖である霞ヶ浦・約167.63 km²とだいたい同じ広さになります。小さくはない湖ですが、その湖水のなかに約二千匹の豚さんたちの残骸がある図を想像すると、「イエスさま、なんということをなされたのですか …」と思わずにはいられません。

山浦玄武クンの猛抗議^{やまうらげんぶ}

山浦玄嗣^{はるつぐ}先生の『父さんの宝物』という本に、先生の四男・玄武クン^{げんぶ}(この本の初版発行が1987年であり、彼が小学校低学年の頃のお話と考えられますから、現在は40代になっておられるでしょうか)が、「父さん、イエス様はひどいじゃないか。一頭四万五千円もする豚、それが二千頭、合計すれば九千万円する豚を海の中に落として殺してしまうなんて、めちゃくちゃだべさ。そんな大損害をかけておいて、おわびもしないし、弁償もしないんだ」と、玄嗣先生に口をとんがらせて抗議した — という話が載っています。山形のおじいちゃんが毎日えさをやり、排泄物を始末し、とても苦勞して豚を育てていることを知っていた玄武クンにとって、イエスの行いは「トンデモナイこと」に感じられたのですね。一瞬たじろいだ玄嗣先生、玄武クンの主張を認めたくなくて「反撃」に出ました。要約すると次のようになります。

「イエス様がほんとうにこんなことをしたと思うか。うそにきまっているではないか！ 九十九匹の羊を残しておいて、たった一頭の迷子の羊をさがしまわるおかただぞ」。

「新約聖書を書いたのは人間だ。イエス様が言ったり、したりしたことはみんな、それを見たり聞いたりした人たちが、口から口へ語り伝えたのさ。伝言ゲームをすると、最初の人が伝えた内容と、最後の人が発表した内容がちがって大笑いするだろう。どんなに正確に伝えたつもりでも、もとの話はかならず変形し、ゆがむもんだ」。

「どんなふうにゆがむかという、話を伝える人が、どんなところに興味をもったか、その話からなにを連想したか、どこが大切だと思ったか … によるんだ」。

イエスは神さまの愛を説いた人だから、そんなことをするはずがない。『福音書』はイエスの言動を見聞きした多くの人たちが、何十年にわたって口伝してきたものをまとめて、文字として書き記したものだから、その内容がすこしずつ変わってくるのはやむを得ない。その内容は話を聞いた人が「何にこころを動かされ」、「何を後世の人たちに伝えなければならないか」と思ったかによ

って変形する — ということです。ではなぜ、この話を言い伝えたユダヤの人たちは悪霊を「豚」の中に追い込んだのでしょうか。

ユダヤ人はなぜ「豚」がきらいなのか？

みなさんはユダヤ人の方々や、イスラム教を信じているアラブ諸国の人たちは「豚肉」を食べないことをご存知でしょう。なぜ、栄養があっておいしいのに食べないのか — その理由を知るとは難しいとされています。ただ、「おそらくこれが理由だから」という憶測はいくつかあります。インターネットの記事からひろったものをご紹介します。

- (1) イスラム教の聖典『コーラン(クルアーン)』に、「豚を食べないように」と書いてあるから。
- (2) 豚による伝染病が流行っていたという説。豚は雑食性のため、それに伴う病気の危険性がありました。そこで豚を食べて命を落とす危険をなくすため『コーラン』に追加したとされます。
- (3) 豚を食べると不浄になるという説。「豚は繁殖力が高く、さかんに交尾する。その豚を食べる人は不浄になり色魔になってしまう」、「欧米人に比べ、ムスリム(イスラム教徒)が理性的なのは豚を食べないから」など、イスラム宗教学から考えた理由。ちょっと説得力に欠けますね。
- (4) 「ぜいたくは禁止説」。貧しい人が食べられない「貴族の高級品・豚」を禁じたという理由。
- (5) ユダヤ教の名残り説。旧約聖書『レビ記』(11章2～8節)に、『地上のあらゆる動物のうちで、あなたたちの食べてよい生き物は、ひづめが分かれ、完全に割れており、しかも反すうするものである。(中略) いのしし(豚は「^{いのしし}猪」を家畜化したもの)はひづめが分かれ、完全に割れているが、全く反すうしないから、汚れたものである。これらの動物の肉を食べてはならない』とあります。ユダヤ教がもとになって、キリスト教やイスラム教が誕生した経緯を考えると、その「名残り」だとも思えます。
- (6) 農耕民族の家畜を嫌ったという説。ユダヤ教とイスラム教には狩猟・遊牧民族出身の信者が多く、農耕民族を蔑視するうちに彼らの飼っている豚も嫌うようになったという考え方。豚の飼育にはナラの森、大量の水、定住の小屋が必要であり、移動生活の遊牧民族には飼育は困難です。また、砂漠地域では森が少なく、水が貴重なので豚を飼う余裕がありません。

— などがありません。どれも「決定的な理由」と言えないようです。(5)あたりが有力かもしれませんが。

イエス様も「豚嫌い」だった？

このマタイ福音書が成立(紀元後80年代後半)するずっと前からユダヤ人は「豚嫌い」だったようです。豚を食べると穢れるとか、天国に行けなくなるなどと信じていたといえます。山浦先生によれば、当時の人たちは理由のわからないことは何でも神さまのせいだという信心深い癖があり、『自分たちが豚が嫌いなのは、神さまが、豚を食ってはならないと、命じたためだという、すばらしい理由を見つけ出し』、「律法」(上記の(5)、『レビ記』)に書き込んだのだろう — と書かれています。ユダヤ人たちは豚を飼ったり食べたりする人間を白い目で見っていたわけです。この話の舞台である地方は、ガダラ人という農耕民族の住む土地で、彼らは豚を飼って生計を立てていました。ユダヤ人から見れば忌むべき人たちだったわけです。

さて、イエスも『二千年前のユダヤに生きた一人の人間でユダヤ教徒だったわけですし、確実にその時代の価値観に影響されていました』と、岡野昌雄先生(国際基督教大学名誉教授)は指摘されます。その根拠として、『マタイ』7章6節の『神聖なものを犬に与えてはならず、また、真珠を豚

に投げてはならない。それを足で踏みにじり、向き直ってあなたがたにかみついてくるだろう』というイエスの言葉を引用されます。「価値あるものでも、その価値を知らない人にはなんの役にも立たないこと」を指す「豚に真珠」という言葉は、ここから採られているのです。「犬」も当時のユダヤ社会では同じように嫌われていました。犬好きの方、がまんしてください。動物愛護の考え方が広くとられている現代では、どうしても違和感がありますね。人間は動物よりも優れた存在であり、動物にも食べてよい清いものと、食べてはいけない汚れたものがあるという考え方をしていた当時の人々にとっては、豚や犬は人間よりも価値のないものだと考えるのは当然だったと言えるでしょう。現代の私たちには私たちなりの価値観があります。イエスの動物観に対し、「ひどいよね」と思うのは当たり前のことです。イエスをかばい、守るために当時の価値観まで認める必要はありません。

熱心さのあまり …

この奇跡物語を語り伝えてきた数えきれないほどの人々は、イエスの愛弟子をはじめとする熱心な初期のキリスト教信者でした。誠実に『聖書(旧約)』の教えを学び、イエスの言葉を信じ、いのちを賭けて宣教し、信仰を守りつづけた人々たちです。それらの人たちが絶大なる信頼と親しみをこめて、自分たちの「主」であるイエスの偉大さを称えるために書かれた物語の一つがこの話です。

自分たちの救い主が悪霊を豚の中に封じ込め、追い払ったという奇跡を伝えたいと願った彼らは、「大嫌いな豚なら、何十頭、何百頭、いや何千頭、犠牲になってもかまわない。多ければ多いほど、主のすごさが伝わるだろう …。ガダラ人には迷惑な話？ あの汚らわしい豚を飼って生活し、食ってる連中の思いなんてどうでもいい。被害額が九千万？ 豚など食ってるから、神さまの罰を受けるんだ …」と思っていたのかもしれませんが。話はどんどん拡大され、ゆがめられたと考えられます。ガダラ人にとって、そして「豚好き・犬好き」の後世の人たちには「イエスはなんてヤツだ、動物虐待者だ！」と思われてしまう〈ボーンヘッド〉を犯してしまったというわけです。

イエスがおこなった奇蹟については、第 38 回で大貫隆先生の分類をご紹介しました。その中で「悪霊^{ばら}祓い」などの「癒しの奇蹟」について、「歴史の事実として奇蹟行為がまったくなかったということは考えられない」など、大貫・佐藤両先生のお考えを書きました。もう一度お読みいただければ幸いです。第 66 回でご登場いただいた田川健三先生は「癒しの奇蹟」に関して、『いずれも、奇蹟物語として伝説化され、従って奇蹟的に誇大な語り口で、さらに、宗教的な思惑も混入されて伝承として語りつがれてきたものであるから、むろん、そのまま歴史の事実であるはずがない。しかし出来事そのものとしては、事実であったとしても不思議ではないようなものばかりで、イエス自身が自分の病氣治癒の能力について持っていたあの自信に満ちた語り口からしても、どれが事実でどれが事実でないか判明はできないにせよ、かなりな程度実際に生じた事柄であるのは確かだろう。少なくとも本人たちは治ったと信じた、という意味で。』と書いておられます。

ユダヤの人たちの「ボーンヘッド」一。私たちにとって「他人^{ひと}事^{こと}ではない」はずです。「自分中心」で他者を見たり、出来事を受けとめると、おもわぬ「落とし穴」が待ち受けているかもしれません。「エゴイズム」はいつも私たちの正しい判断・行動をじゃましようとねらっています。

神さま、私たちが感謝と祈りのうちに、互いに仕え合い、ともに歩む恵みに与られますように。

(2017.07.28.)

【引用・参考にした書籍など】 ・新共同訳『聖書』 ・田川健三『イエスという男』

- ・山浦玄嗣 『父さんの宝物 改訂3版』(イー・ピックス、2013)
- ・岡野昌雄 『イエスはなぜわがままなのか』(アスキー新書、2008)
- ・玉木正之 『新潮 プロ野球大辞典』(新潮文庫、1990)